沖 縄 地 理 学 会 会 報

第53号　2011年1月31日

前門 晃 新会長に聞く
「而立」から「不惑」に向けたワンステップとして

――会長ご就任おめでとうございます．前門先生は何代目になりますか．

初代・田里友哲先生（故人），第2代・宮城真宏先生，第3代・中山 満先生（故人），第4代・石川友紀先生，第5代・河名俊男先生．私は第6代目です．

沖縄地理学会は，創立が1982年ですから，やがて30年になります．『論語』に「吾れ十有五にして学に志す，三十にして立つ，四十にして惑わず,……」（吾十有五而志于学，三十而立，四十而不惑,……）とありますが，沖縄地理学会は三十を目前に立派に独り立ちできたのではないでしょうか．前の河名先生の会長時代には，学会誌『沖縄地理』の査読制の導入など，学会の体制がかなり整備されました．

全国に地理学関係の学会がたくさんありますが，毎年大会を開催し学会誌を定期的に発行している地方学会はそんなに多くはないと思います．学会誌『沖縄地理』は7号までは不定期で平均して3年に1回の発行でしたが，8号以降（～現在10号）は，毎年発行になりました．その予算的な裏づけもできています．しかも，毎号投稿者が多く，論文のレヴェルは決して低くありません．

――なぜ，沖縄地理学会は元気があるのでしょうか．

それは何と言ってもこれまでの会長はじめ会員一人びとりの努力の賜物です．そのベースには，学会活動を中心的に支えている大学の地理学教員（琉大に7人，沖国大に3人，沖大に1人）が多く，また非常勤教員もいる．さらに，地理出身の学校教員，県庁職員，市町村職員，民間調査機関研究者など，地理に関わって頑張っておられる方々も少なくありません．そういう，学会を支え，学会に大きな関心を持っている人々が多いという点が，沖縄地理学会が活発に活動を継続してこられた最大の原動力でしょう．もちろん，沖縄という地理的なまとまり，地理的ユニークネス，研究対象の豊富さなども関係しているでしょう．

――南の地理的特色を発揮するためには？

たとえば沖縄の地理的特徴の一つに「亜熱帯」があります．近代化という短い歴史からすれば，亜熱帯地域は全国からとり残された遅れた地域と見られてきたという一面は否定できません．しかし，ほんとうにそうなのか，亜熱帯という地域が「近代化」という視点だけでは見えない，これまでに先人たちが苦労して編み出してきた地域の特色，風土というものがあると思います．南の沖縄は学問が根付きにくい風土がある，とよく言われますが，プロ意識を持って，そういう地域の特色を見出していく．そのことが沖縄に生きる人々の自信と誇りにつながっていくと思います．それが，つぎの「不惑」に向けたワンステップだと考えています．

――これから，特に何に力を注ぎたいですか．

これまでの活動を継続することがなによりも大切なことですが，継続は同じことの繰り返しではなく，絶えず「プラス・アルファ」が求められると思います．まだ具体的に「プラス・アルファ」が何なのかは見えていませんが，一つは地理の「財産」を生み出し続けること．もう一つは，その学問の成果をこれまで以上に外に向けて広く「発信」することです．これまで，ホームページの整備や，学会誌の全国向け送付を行なってきました．いま，新たな情報発信手段として，デポジトリー(Depository Libraries)という概念があり，ウェブサイトに情報を蓄積し，世界のどこからでもその情報を引き出し閲覧できるようなシステムが各分野で急速に進んでいます．そういう情報蓄積・発信システムができるといいなと考えます．

財産を生み出し蓄積し発信するには，それを支える人がいなければできません．これまで以上に，会員一人びとりが,学会への帰属意識,参加意識を持てるようにしなければなりません．「学会活動はみんなでやる」

という方向性をもっともっと出せるといいな，と考えています．そのためには，各会員が参加しやすいような学会活動というものを常に念頭に置かなければなりませんが，評議員はじめ会員皆さんのアイデアと力を結集していきたいと願っています．

（2010年11月13日のインタヴューを編集．タイトルは編集子による．）

第29回総会･大会報告

2010年7月24日(土)，10:00～

会場：沖縄国際大学5号館107教室（研究発表（口頭），総会，およびシンポジウム）

：沖縄国際大学5号館1Fロビー（研究発表（ポスター））

：琉球料理「ぱいかじ」沖国大前店（懇親会）

会員多数参加の下，まず崎浜 靖幹事の司会で総会が開催され，渡邉康志会員を議長に選出した．その後小川 護幹事から2009年度の事業報告，次に廣瀬 孝幹事から2009年度の決算報告（別表1），上原冨二男・前津政廣会計監査から監査報告（会計の廣瀬幹事が報告）がなされ，承認をうけた．引き続き，小川幹事から2010年度の事業計画，廣瀬幹事から2010年度の予算案（別表2）がそれぞれ提出，審議され，いずれも原案どおり承認された．2009年度事業報告，2010年度事業計画は以下のとおりである．

(1) 2009年度事業報告

2009年度（第28回）総会・大会

大会：2009年7月25日(土) 沖縄国際大学5号館107教室および1Fロビー

大会発表件数：一般発表7件，ポスター発表2件（発表要旨は「会報」51号に掲載）

参加者：30名

総会：2009年7月25日(土) 沖縄国際大学5号館 107教室

2009年度懇親会

2009年7月25日(土) ぱいかじ沖国大前店

参加者：22名

日本地理学会2009年度秋季学術大会の開催(共催)

2009年10月24日(土)～27日(火) 琉球大学

参加者：406名

第5回地理教育公開シンポジウム

（日本地理学会地理教育公開講座との合同開催，沖縄県教育委員会の後援）

2009年10月24日(土)

「地理教育，はじめの一歩はどうするの？」

講師：荒木一視(山口大)・川田 力(岡山大)・西岡尚也(琉球大)

コメンテーター：儀間奏子(名護市立大北小)・中村謙太(八重瀬町立東風平中)

司会：竹内裕一(千葉大)・近 正美(千葉県立生浜高)

参加者：80名

巡検（日本地理学会との共催）

10月26日(月)

第1班「亜熱帯の地形と地形プロセス：サンゴ礁・波食棚・泥岩丘陵・台風石・海食崖・地すべり」

案内者：河名俊男(元琉球大)，前門 晃(琉球大)，小暮哲也(筑波大)

参加者：14名

第2班「沖縄の基地とまちづくり」

案内者：上原 冨二男(沖縄大)，上江洲 薫・小川 護・崎浜 靖(沖縄国際大)，堂前亮平(久留米大)，西岡尚也(琉球大)，濱里正史(沖縄ライフプラン総合研究所)

参加者：39名
10月26日(月)～10月27日(火)
第3班「シマンチュ(島人)ガイドのエコツアー」
案内者：小野有五(北海道大)，尾方隆幸(琉球大)
参加者：28名
2009年度例会
2009年8月7日(金)沖縄国際大学5号館107教室（沖国大沖縄経済環境研講演会との共催）
堂前亮平(久留米大)：沖縄の都市特性とは何か――沖縄らしさの都市像を求めて
参加者：100名
『沖縄地理』(第10号）発行（2010年6月25日）
「沖縄地理学会会報」(第51号）発行（2010年1月25日）
「沖縄地理学会会報」(第52号）発行（2010年6月30日）
第29回評議員会の開催
2009年7月17日(金)18:30～，琉球大学法文学部研究棟209室
2009年度幹事会の開催（場所はすべて琉球大学法文学部研究棟209室）
第1回：2009年7月8日(水)，第2回：2009年12月16日(水)，第3回：2010年3月10日(水)
第4回：2010年5月19日(水)

(2) 2010年度事業計画

2010年度（第29回）総会・大会
2010年7月24日(土）沖縄国際大学5号館107教室および1Fロビー
2010年度懇親会
2010年7月24日(土）パブロ
第6回地理教育公開シンポジウム
2010年7月24日(土）沖縄国際大学5号館107教室（後援：沖縄県教育委員会）
テーマ：「教養としての地理・地理教育のあり方を考える」
2010年度県内巡検
2011年2月予定
案内者：濱里正史(沖縄ライフプラン総合研究所)
2010年度例会
2010年8月12日　沖縄国際大学（沖縄国際大学沖縄経済環境研後援会との共催）
谷口智雅（立正大・非)：テーマ未定，分野は水文学
2010年8月18日　琉球大学法文学部研究棟211地理学実験室
藁谷哲也（日本大)：カンボジア・アンコールワット遺跡を構成する砂岩ブロックの風化プロセスと風化速度
2010年12月6日(月）沖縄国際大学13号館1階研究所会議室（沖国大南島研シマ研究会との共催）
河名俊男(元琉球大学教授)：琉球列島における歴史津波に関する報告

『沖縄地理』(第11号）の発行（2011年）
「沖縄地理学会会報」(第53号，第54号）の発行
ロゴマークの募集
第30回評議員会の開催
2010年7月16日（金)，琉球大学法文学部研究棟211地理学実験室
2010年度幹事会の開催　（場所は，琉球大学法文学部研究棟209室）
第1回：2010年7月7日(水)
以下，2ヵ月に1回程度の割合で，開催予定

(3) 2010･2011年度役員

会　　長　前門 晃
会計監査　前津政廣・森山 靖
幹　　事　小川 護・鍬塚 賢太郎・崎浜 靖・渡久地 健・西岡尚也・廣瀬 孝
評 議 員　上江洲 薫・上原 冨二男・尾方隆幸・小川 護・鍬塚 賢太郎・崎浜 靖・渡久地 健
　　仲田邦彦・中村謙太・西岡尚也・廣瀬 孝・福永 忍・町田宗博・宮内久光

2010年度の大会は，一般研究発表(口頭)，ポスター発表，シンポジウムがなされました．発表要旨およびシンポジウムの報告は次のとおりである．

一般研究発表（口頭）要旨（3件）

玉泉洞における大気環境モニタリング

尾方隆幸(琉球大学教育学部)・池田未来(琉球大学・学)

洞窟内の大気環境と観光客数との関係を調べるため，沖縄島南部の観光鍾乳洞「玉泉洞」で高精度モニタリングを開始した．観測は，データの空間分布を明らかにするための移動観測と，データの時間変化を明らかにするための連続観測に分けられる．ハンディタイプのモニターを用いて不定期に実施している移動観測では，一日に4回，45分ほどかけて観光ルートに沿って移動しながら，20地点で温度とCO_2濃度を測定している．連続観測では，鍾乳洞内の1地点に温湿度センサー・CO_2センサー・データロガーを設置し，60分ごとにデータを自記させている．本発表では，2010年のゴールデンウィークに実施された移動観測のデータを速報として提示した．

観光客が1,335人だった4月29日には，CO_2濃度は午前の測定より午後の測定で高い値を示し，750-1,000 ppm前後の値が観測された．5月2日には5,034人の観光客があり，午前8時台に500-750 ppm程度であったCO_2濃度が，午後3時台には，場所によっては2,700 ppm程度まで上昇していた．5月4日の観光客数は4,739人で，この日には4,000 ppm前後の値が鍾乳洞内の広い範囲で観測された．

このように，観光客数に応じたCO_2濃度の変動が観測されている．ゴールデンウィークの後半でとりわけ高い値を示したことは，CO_2濃度が夜間に下がりきらずに翌日を迎え，その状態で多数の観光客が入ったためと考えられる．また，鍾乳洞内のCO_2濃度の分布は均一ではなく，鍾乳洞外の気圧変化によって大気の流れが発生し，それが高濃度CO_2の集中・拡散を引き起こしていることが推察される．現在，連続観測データを用いて，観光客数・温湿度・CO_2濃度の相関関係を詳細に解析しており，改めて報告することとしたい．

沖縄本島における一般廃棄物の処理と課題
――那覇市･宜野湾市・浦添市・東村・嘉手納町･恩納村を事例として――

小川 護（沖縄国際大学経済学部）

本発表では，沖縄県における一般廃棄物がどのように移動・処理されているのか，さらに一般廃棄物の現状を明らかにすることを目的として考察してきた．明らかになったのは以下の通りである．

第1に沖縄県の一般廃棄物の総排出量は，2000年には54.8万トンの排出量であったが2006年には52.04万トンと減少傾向にある．この背景には，1997年における廃棄物処理法の改正，2000年にはダイオキシン類の規制強化，や「循環型社会形成推進基本法」などの整備がすすんだことがあげられる．一般廃棄物排出地域の分布をみると，当然のことながら人口分布に比例し，本島中南部の約80万人の人口が集積している沖縄コナベーションが中心となっている．

第2には一般廃棄物排出形態別についてみると，本島における大部分の市町村は生活系一般廃棄物が一般廃棄物量の大部分を占めているが，中でも観光産業の立地している恩納村や北谷町の場合には，ホテルや事業所から排出される事業系一般廃棄物が一般廃棄物量に占める割合が高い．

第3として一般廃棄物の収集・処理体制は市町村独自で設置するよりも，事業組合を立ち上げて収集・処理する市町村が多い．本島における組合数は13組合，市町村単独で取り組んでいるところは2自治体となっている．組合設立が多い背景として，一般廃棄物の処理施設を建設するには，財政的な問題や，「迷惑施設」ということから地域住民から建設への賛同が得られない，また土地の確保が困難などの問題などがあげられる．

第4に各組合および単独の市町村における一般廃棄物の処理についてみてみると，組合を設立している市町村では，隣接する市町村と清掃事務組合，清掃組合，行政事務組合を設立し，中間処理施設，最終処分施設，さらには何の施設をも有しない市町村は分担金を受け持つという役割分担が明確化している．しかも島嶼地域という隔絶された地域であるため，本土などに見られる県境を越えて処理するパターンはみられない．今回，市単独の事例として，浦添市の事例についてみたが，浦添市の場合，2002年には，ダイオキシン対策として，これまでの中間処理に対して，灰溶融炉を建設し，最終処分場をもたず，最終的な灰は県外に移出しているという他の組合とは異なる対応策をとっている．

第5として米軍基地の一般廃棄物は，県内処理業者の入札制度が取られており，落札した業者が一般廃棄物を収集している．また，基地外に居住している外国の方々の一般廃棄物は，マンション等を管理する不動産業者と市内の許可業者で契約を交わし，事業系の一般廃棄物として有料で収集運搬される．処理に関しては，2市1町で構成する倉浜衛生施設組合又は，倉敷環境（民間）で実施されている．

第6には，ごみ袋有料化の意識調査から，排出者の一般廃棄物がどのように移動・処理され，これにかかる処理費用等の認識についてみたところ，それらを認識している住民は約半分を占めた．また，ゴミ袋有料化などの施策は，一般廃棄物を減量させる面でそれなりの役割を果たしているといえよう．今後さらなる一般廃棄物の減量化のためには，ごみ減量に対する排出者ひとりひとりの意識向上と同時に将来を見据えた学校教育における体系的な環境教育の導入が必要となるであろう．

今後は，産業廃棄物，リサイクルを事例とする廃棄物問題について考察を進めて勧めていきたいと考えている．

沖縄県本部町水納島と宮古島市大神島における架橋に対する島民意識

堀本雅章（法政大学沖縄文化研究所）

架橋により便利になる一方，環境の悪化などデメリットも生じることが多い．本研究では，人口，親島からの距離，定期船の便数や欠航率が類似している沖縄県の水納島と大神島を取り上げ，島民の架橋に対する意識調査を行った．水納島は，沖縄県本部町から約7km西に位置し，渡久地港と1日3往復の定期船（夏季は増便）により約15分で結ばれ，海水浴客が多く訪れる島である．大神島は，宮古島の北約4kmに位置し，宮古島の島尻漁港と1日5往復の定期船により約15分で結ばれ，高齢者がほとんどの島である．

本稿での研究目的は，産業構造や島外出身者の比率が異なる二つの島で，架橋に対して島民の意識に差異がみられるのか，さらに各島における属性の違いによる架橋への賛否について比較し，その要因を解明することである．調査は，20歳以上の全島民を対象に水納島では2009年に，大神島では2008年に実施し，水納島では島民43人のうち未成年者6人を除く37人中34人から，大神島では島民30人のうち28人から回答を得た．各島における属性による比較は，大神島では全員が島出身者で，大神島での居住歴の長い高齢者がほとんどであるため，性別による比較のみとし，水納島では出身地による比較も行った．

架橋の賛否について，水納島では賛成4人，反対25人，どちらとも言えない2人，分からない3人で，大神島では賛成7人，反対18人，どちらとも言えない1人，分からない2人である．次に，架橋に賛成した理由は，両島民ともに便利になるからで（特に急病の時），架橋に反対した理由は，生活環境の悪化（人や車の自由な出入りによる騒音，治安の悪化，ゴミ問題等）が最も多く，水納島では，自然破壊・生態系が壊れるため架橋に反対する回答も多くみられ，産業構造の違いにより差異がみられた．次に，架橋の賛否について各島における属性により比較すると，水納島では性差による違いはみられず，大神島では架橋に賛成した7人は全て男性で，女性からは肯定的な意見は全くみられなかったが，その背景には，女性のほとんどが島外での居住歴がなく，見知らぬ人が自由に出入りできることへの不安をあげる者が多いことによる．また，水納島において，架橋に賛成した4人はすべて島出身者で，島での居住歴が長く過去に急病の時苦労した経験から橋が必要との回答が複数みられた．

調査の結果，ほとんどの水納島民，大神島民が環境の悪化を懸念し，架橋に反対であった．その背景には，欠航率が低く定期船が安定して運航され，対岸の港まで約15分で行くことができ，架橋によるメリット以上にデメリットが大きいことがあげられる．

ポスター発表要旨（3件）

近代先島諸島におけるマラリア有病地の空間表現
――石垣島名蔵を事例として――

崎浜 靖（沖縄国際大学南島文化研究所）・鈴木厚志（立正大学地球環境科学部）

（研究のねらい） 20世紀前半の先島諸島において，年間1000人から2000人のマラリア患者の発生が報告されている．これまでの研究から，先島諸島のマラリア有病地は，主に「高島」とも呼ばれる非石灰岩の島において，起伏があり，水系の発達した地域に分布したことが明らかにされている．そもそも，マラリア媒介蚊であるコガタハマダラカは，水たまりや水田が形成されやすい湿地帯を好み，こうした地理的環境を有する地域が有病地となった．本報告では，20世紀前半の先島諸島におけるマラリア有病地の地理的環境を，高精度DEMと旧版地形図や史料を組み合わせて復元し，土地利用や集落形態との関係から考察を行った．事例地域として，石垣島全島および名蔵集落を取り上げた．

（研究方法）本研究では，まず先島諸島の地形別の島分類を行い，表層地質と土地利用との関係，各島嶼の地形別面積を比較した．続いて，20世紀前半の石垣島におけるマラリア罹患状況を整理し，1922年の集落別マラリア患者数を算出して地図化した．地形表現には10 m間隔のDEMを使用し，これにより石垣島の地理的環境を復元した．さらに集落単位のマラリア有病地の事例としては，石垣島西部に位置する名蔵集落を5万分の1地形図（1921年）から土地利用状況を明らかにし，それらの幾可補正により高精度DEM上に表示し，その一部は水系図とともに3次元視覚化を試みた．

（まとめ） 旧版地形図をはじめとする地図資料の幾可補正と高精度DEMを組み合わせて検討した結果，本研究の分析結果と課題は以下の通りである．

①石垣島には字別にみて，5つの無病地と9つの有病地が確認できる．無病地はいずれも石灰岩が表層を覆うが，有病地では，一部に石灰岩が分布する地域が確認されるものの，概ね泥岩質の地質が表層を覆い，水田としての利用が比較的容易である．なお，無病地の罹患者は有病地への通耕を原因とすることが多い．

②かつてのマラリア有病地であった名蔵集落のマラリア罹患率は50 %を超えていた．海岸部には砂州で囲まれた潟が形成され，マングローブの生い茂る湿地が展開する．そして田・畑と集落の周囲には荒地が広がり，水系網も複雑に入り組んでいたことが明らかとなった．

③高精度DEMによる地形表現は緩傾斜地の土地利用分析にも優れている．今後は他の有病地の地理的環境の復元に努め，宮古諸島を含む先島諸島全域にわたるマラリア有病地の特性把握を進める予定である．

琉球石灰岩の石切場跡におけるカメニツァの成長速度
――沖縄島読谷海岸の事例――

青木 久（大東文化大学経営学部）・前門 晃（琉球大学法文学部）

石灰岩からなる岩石海岸に形成される小さな凹地は，カメニツァと呼ばれ，この地形形成には，雨水や海水飛沫による石灰岩の溶食作用が深く関係しているといわれている．本研究では，沖縄島読谷海岸の石切場跡を利用して，石切場跡に形成されているカメニツァの成長速度の推定を試みた．

読谷村北部の宇座および儀間周辺の琉球石灰岩からなる海岸の潮間帯付近には，数キロにわたって石切場跡が点在している．石を切り出した跡は多角形の平面形状を呈する凹地となっている．底面はほぼ平坦で，そこには種々の径をもつカメニツァが発達している．『宇座誌』（宇座公民館，1974）によると，この地域の石切場は大正末期に始まったとされる．

ホテル日航アリビラの敷地内の，カメニツァが発達する石切場跡を調査地点として選んだ．この地点は海抜1.2 mの高度にあり，満潮位よりわずかに高い位置にある．カメニツァの平面形状はほぼ円形ないし変形

した楕円形を呈している．石を切り出した直後から形成され始めたカメニツァが最も大きく成長していると仮定し，調査地点の中で，大きい長径をもつカメニツァで底面がほぼ水平なものを10個選び，長径，短径そして深さを計測した．深さとしては凹地底の中心付近の鉛直距離を計測した．計測は2006年に実施した．10個のカメニツァの平均深さは 4.7 cm であった．

石灰岩を切り出した直後に溶解がはじまり，カメニツァの形成が始まったと仮定すると，石切場開設の大正末期から現在までの経過時間をカメニツァの形成時間と扱うことができ，カメニツァの深さ方向の成長速度を求めることができる．大正末期を大正15年（1926年）とすると，計測時から80年前であるので，カメニツァの形成時間は80年と見積もることができる．カメニツァの平均深さは 4.7 cm であるから，カメニツァの年平均の形成速度は0.59 mm/年となる．すなわち，年間約0.6 mmの速度でカメニツァが成長してきた（深くなってきた）ことになる．

沖縄島北部亜熱帯林における樹冠遮断に関する研究（Ⅰ）
――琉球大学与那フィールドにおける樹冠通過雨量，樹幹流下量の観測事例――

砂川朋美（琉球大学人文社会科学研究科）・廣瀬 孝（琉球大学法文学部）

本研究では，沖縄島北部亜熱帯林(やんばる）における樹冠による降雨遮断の実態を明らかにすることを目的とし，琉球大学与那フィールドにおいて10×10 mの観測地を設定し，樹冠通過雨量および樹幹流下量の観測を行った．観測地は，亜熱帯性常緑広葉樹林で，優先種はイタジイとイジュであるが，その他様々な樹種が混在している．樹冠通過雨量の計測は9地点で，樹幹流下量の計測はランダムに選定した観測木7本で，転倒マス雨量計および貯留式タンクの両方を用いて行った．また，林外の開けた場所で林外雨量を計測した．さらに，樹冠構造と樹冠通過雨量との関係性を考察するために，樹冠通過雨量観測地点上の樹冠の魚眼写真を撮影し，解析ソフトを用いて樹冠の被覆特性の指標として用いられる LAI（葉面積指数）と樹冠開空率を求めた．観測期間は2009年11月9日～2010年2月11日で，LAIの計測については，冬季（2009年11月）と夏季（2010年7月）の2回行った．

樹冠通過雨量の観測結果を見ると，同一地点における降雨イベントごとの値のばらつきや，たびたび林外雨量を超える箇所がある等の地点ごとの値のばらつき（空間的ばらつき）の両方が観測された．また，樹幹流下量の観測結果を見ると，林外雨量が多い場合に樹幹流下量に大きなばらつきがみられた．このことから，樹冠によって降雨が遮断された後から樹幹流下が発生するまでの間において，周辺樹木や樹木位置，降雨状況などの影響を大きく受けることが考えられた．さらに観測結果から樹冠遮断量を計算すると，林外雨に対する樹冠通過雨量の割合は45.2 %，樹幹流下量の割合は3.7 %となり，樹冠遮断率は51.1 %であった．従来報告されている熱帯林や温帯林の結果と比べると，本観測で得られた樹冠遮断率のほうが高い場合がほとんどであった．この要因には，樹冠貯留量，降水量，樹種などが影響しているものと考えられる．また，観測期間中（冬季）においては，樹冠通過雨量と LAI 及び樹冠開空率との間に明瞭な関係性は見いだせなかったが，冬季（11月）に比べ，夏季（7月）のほうが，LAIが高く，樹冠開空率が低くなっていた．このことから，樹冠通過雨量の季節変化などの存在が考えられる．

今後，実際のプロセスを定量的に明らかにしていくためには，葉面積指数などの樹冠状況との対応，樹種や葉の形態の影響，樹木サイズの影響，降雨強度や風速といった気象要素の影響，季節変化，観測機器の配置の検討など，まだまだ様々な課題が残されている．

第６回地理教育シンポジウムは以下のように実施されました．

第６回　地理教育シンポジウム

（主催：沖縄地理学会，後援：沖縄県教育委員会）

日時：2010年7月24日（土）13:30～17:00

場所：沖縄国際大学5号館107教室（宜野湾市宜野湾2－6－1）

テーマ：「教養としての地理・地理教育のあり方を考える」
趣旨説明（講師紹介）：13:30～35　前門 晃（沖縄地理学会会長）
基調講演：13:35～14:50
　映画で学ぶ地理教育――『シネマ世界めぐり』の出版をめぐって――
　　矢野司郎（京都明徳高等学校教諭）
休憩（10分）
実践報告：15:00～16:00
① 小学校報告：地図帳を使った地名探しクイズ（15:00～15:20）
　　儀間奏子（名護市立大北小学校教諭）
② 中学校報告：地域の教材化を図り社会参画をめざす社会科教育（15:20～15:40）
　　――博物館との協働的な学習を通して――
　　金城 均（読谷村立古堅中学校教諭）
③ TVドラマ「龍馬伝」にみる地理教育（15:40～16:00）
　　西岡尚也（琉球大学教育学部）
コメント：16:00～16:10，コメンテーター：崎浜 靖(沖縄国際大学・南島文化研究所)
休憩（10分）
パネル・ディスカッション（16:20～17:00）講師・報告者と会場の討論会
　「教養としての地理教育――何をどう伝えるのか――」
全体司会：西岡尚也（琉球大学教育学部）

※※※※※※※※※※※※※※※ 例　会　報　告 ※※※※※※※※※※※※※※※

第1回

2010年度第1回例会が，沖国大沖縄経済環境研講演会と共催で，2010年8月12日（木），16:20～17:50に，沖縄国際大学5号館107教室で行われ，谷口智雅氏（立正大学・非）が「アジアの都市発展と水環境変化」のテーマで講演した．参加者は30名で，概要は以下の通りである．

概要：アジア地域において経済発展と人口増加による環境悪化が問題となっている都市が多く見られる．これらの都市で引き起こされている水質汚濁，大気汚染，地盤沈下などの環境問題の多くが，経済開発・成長の優先，環境対策や環境保全の技術開発の遅れ，人口集中による環境容量を超えた過大な負荷などがその一因となっている．このようなアジア諸国で問題となっている都市への環境ストレスは，日本の1950年代から1970年代にかけての高度成長期をはじめ20世紀後半に引き起こされていた問題でもある．このため，日本とアジア地域の水環境・水利用に関する課題や問題，変遷について，都市間比較を行いながら報告が行われた．

第2回

2010年度第2回例会が，2010年8月18日（水），18:00から，琉球大学法文学部研究棟211実験室で行われ，藁谷哲也氏（日本大）が「カンボジア・アンコールワット遺跡を構成する砂岩ブロックの風化プロセスと風化速度」のテーマで発表した．参加者は8名と少なかったが琉球大学の考古学研究室の教員の参加もあった．アンコール遺跡群を構成する岩石の種類や遺跡における風化の実態，また風化程度と建築年代から求めたそれぞれの遺跡における平均風化速度など非常に興味深い報告であった．

第3回

2010年度第3回例会が，沖縄国際大学南島文化研究所シマ研究会と共催で，2010年12月6日（月），16:20から沖縄国際大学13号館の南島文化研究所会議室で行われ，河名俊男前会長（元琉球大）が「宮古・八重山諸島における過去1000年間の歴史津波と伝説の津波――1771年明和津波，1667年の地震と津波，下地島のヨナタマ伝説，多良間島のブナゼー伝説を中心に」のテーマで講演した．参加者は18名であった．1771年の明和津波と1667年の宮古島の地震と津波では，現在の津波石の分布状況とサンゴの年代測定から古文書に記載されている石の移動などとの整合性を再確認していた．また，上記2つの津波時期以外の年代に集中している移動岩塊と古文書にある伝説の津波・大波を照らし合わせて，時期や岩塊の移動などを推定した報

告は，非常に興味深いものであった．

第4回

2010年度第4回例会が，2010年12月27日(水)，18:30から，琉球大学法文学部研究棟211実験室で行われ，柚洞一央氏(札幌学院大学・非）が「日本の養蜂業における自然資源利用――「移動性」と「間接性」のなかで」のテーマで発表した．参加者は11名であった．日本地理学会賞（奨励賞）を受賞した研究の話を中心に，その後の展開について報告が行われた．報告中には，利き酒ならぬ，利き蜂蜜もあり，また，参加者の中には島袋伸三名誉会員や石川友紀名誉会員の顔も見られ，教え子である報告者（琉球大学地理学教室出身）の成長を喜ばれていた．

※※※※※※※※※※※※※※※※ 新　入　会　員 ※※※※※※※※※※※※※※※※

※※※※※※※※※※※※※※※※ 退　会　会　員 ※※※※※※※※※※※※※※※※

※※※※※※※※※※※※※※※※ 学　会　消　息 ※※※※※※※※※※※※※※※※

第30回評議員会　2010年7月16日（金）18:30～，琉球大学法文学部211地理学実験室にて開催され，主に以下のようなことが議論・報告された．

1. 会員の入退会の承認．
2. 2010年度大会・総会の準備（大会プログラムの確認，2009年度事業報告，決算，2010年度事業計画，予算，役員改選）．

2010年度第1回幹事会　2010年7月7日（水）18:30～，琉球大学法文学部209教室にて開催され，主に以下のようなことが議論・報告された．

1. 2010年度の大会について（準備状況，プログラムの検討）．
2. ロゴマークの作成について（2010年度の事業として募集）．
3. 会誌『沖縄地理』10号の発行について．

2010年度第2回幹事会　2010年10月20日（水）18:30～，琉球大学法文学部209教室にて開催され，主に以下のようなことが議論・報告された．

1. 幹事の役割分担について．
2. 2011年度の大会について（日程，開催場所）．
3. ロゴマークの募集について（募集の仕方など）．
4. 会誌『沖縄地理』11号の発行について．

2010年度第3回幹事会　2010年12月1日（水）18:30～，琉球大学法文学部209教室にて開催され，主に以下のようなことが議論・報告された．

1. 2011年度の大会について（日程，開催場所の再確認）
2. ロゴマークの募集について（具体的な募集案の検討，入賞者への賞品など）．
3. 会誌『沖縄地理』11号の発行について（原稿募集について）．
4. 会報について（54号からの体裁変更，会員からの原稿の投稿）．
5. 今後の例会や巡検について

◎沖縄地理学会のロゴマークの公募について

平素は沖縄地理学会に御理解，御協力をいただきありがとうございます．

さて，このたび沖縄地理学会では2012年に学会創設30周年を迎えるのを記念し，下記の要領にてロゴマークを公募することになりました．ロゴマークは会誌・会報に掲載されるだけではなく，いろんな学会関連の機会に使用します．ふるってご応募ください．

■①ロゴマークは，通常の使用に際しおおよそ右の枠内に収まるサイズをイメージして下さい．ただし縦横比は自由です．

原稿サイズは最大A4までとします．

■②応募資格：どなたでも応募できます．

■③使用する筆記具，色彩などは自由です．

■④しめ切り：2011年6月30日（郵送必着）

■⑤提出先：〒903-0213
沖縄県中頭郡西原町千原1番地
琉球大学法文学部地理学教室
沖縄地理学会　事務局

■⑥入賞者には以下のような賞品を授与します．

特賞1名　30,000円相当の図書カード

佳作3名　10,000円相当の図書カード

なお，応募作品の著作権は沖縄地理学会に所属します．

また，作品には専門家の意見で加筆・修正を加えることもあります．

■⑦問い合わせ先：西岡尚也（琉球大学教育学部）

電話：098－895－8410

Eメール：nishioka@edu.u-ryukyu.ac.jp

■沖縄地理学会の紹介

◎沖縄地理学会（英語名：OKINAWA GEOGRAPHICAL SOCIETY）

1982年8月28日創設，事務局：琉球大学法文学部地理学教室内に置く．毎年1回大会と数回の例会，巡検を開催．会員は沖縄県内のみならず全国に分布（約130人）しています．

◎これまで学会誌『沖縄地理』を10号と，『会報』53号を発行してきた．また近年は地理教育公開シンポジウムを，沖縄県教委の後援を得て毎年開催し，学校教育関係のみならず，一般市民への地理学・地理教育の普及・親睦を目標に活動をしている．

◎キーワード：地域・空間・自然環境・人間と社会・沖縄県・地球．

詳細はHPを（http://www.cc.u-ryukyu.ac.jp/~chiry211/）参照ください．

◎平成23年度定期大会のお知らせ

平成23年度定期大会は，**2011年7月23日（土）**に沖縄大学を会場に開催予定です．

◎会誌「沖縄地理第 11 号」への投稿案内

「沖縄地理第 11 号」を今年度末に（2011 年 6 月）に発行する予定です．会員の皆様には，ふるって投稿していただくようご案内いたします．

原稿は，沖縄地理学会投稿規定・執筆要領をご一読の上，原稿送付状を添えて原稿のハードコピー3 部を提出して下さい．原稿送付状は，事務局（廣瀬：thiro@ll.u-ryukyu.ac.jp, 895-8191）にご連絡いただければ，ワードのファイルをお送りします．また，学会ホームページからもダウンロードできます．なお，投稿をご検討の方は，前もってご連絡いただけますと，その後の作業の都合上助かります．

提出期限：2011 年 3 月 31 日（水）

提出先：沖縄地理学会事務局
〒903-0213
沖縄県中頭郡西原町千原 1 番地
琉球大学法文学部地理学教室内

問い合わせ先：沖縄地理学会編集委員会委員長　西岡尚也（琉球大学教育学部）
電話：098－895－8410
E メール：nishioka@edu.u-ryukyu.ac.jp

◎「例会」のお知らせ

南島地名研究センターとの共催で，下記のとおり例会を開催いたします．

日時：2011 年 3 月 5 日（土）午後 4 時 30 分～5 時 40 分
場所：沖縄国際大学　5 号館 107 教室
講師：目崎茂和氏（南山大学教授）
演題：**沖縄・琉球・日本・倭の神話風水地理――『古事記の法則』からみた沖縄風水地理**
＊例会終了後，沖縄国際大学向かいのレストラン「パブロ」で懇親会をもちます（会費 2000 円）．

会員の新刊書案内

■**目崎茂和著 『古事記の法則――風水が解き明かす日本神話の謎』**（東京書籍，2010 年 9 月，四六判，373 ページ 1900 円＋税）［目次］陰陽五行説から「稲羽の素兎」をみる／高天原・神々は仕分けされた／大八嶋国／大八嶋国での国づくりの神々／黄泉国／アマテラスとスサノヲの誕生／アマテラスとスサノヲの統治／高天原での宇気比と天石屋戸／出雲のスサノヲとヤマタノオロチ／大国主命の国づくり／天下る神の子とオホクニヌシの国譲り／天孫降臨／海幸毘古と山幸毘古／「序」にみる古事記の法則

■OECD 編／**鍬塚 賢太郎**ほか訳 『地図でみる世界の地域格差 OECD 地域指標 2009 年版――都市集中と地域発展の国際比較』（赤石書店，2010 年 4 月刊 200 ページ，3990 円＋税） 本書は，教育水準や雇用機会，知識基盤産業の活力などを定量化することで，OECD 諸国の各地域における生活の現状と改善方法に関する概観を提供する．

◎次号から「会報」が変わります．お気軽にご投稿ください．

「やわらかく・楽しく／気軽に投稿できる会報」を目指します．会員の皆様の多様な意見，考え，研究の余滴・シーズ，旅先で感じたこと，教育現場や職場で考えていること，などなど，何でも結構ですから，掲載を希望する原稿がありましたらお気軽に事務局（廣瀬：thiro@ll.u-ryukyu.ac.jp, 098-895-8191）までご寄稿ください．「一枚の図（写真）で語る地理トピック」（図＋1000字程度），「琉球列島の地理散歩」（写真＋2000字程度）の箱を設けます．どしどしご投稿ください．また，「会報」に対するご意見やご希望があれば，お聞かせください．「会報」の愛称を募集いたします．ご応募くださいませ．

沖縄地理学会会報　第53号
2011年1月31日
発行人　前門 晃
事務局　〒903-0213　西原町千原1番地
琉球大学法文学部地理学教室内
電話(098)895-8873
(098)895-8191
http://www.cc.u-ryukyu.ac.jp/~chiry211/
振替口座　02040-4-4697